

死について書く詩人 - ポウプ, 墓碑銘, エレジー

辻 麻子

ジョン・ウェブスターの芝居は死にとりつかれた主人公たちで溢れている。ジョン・ダンも自ら経かたびらをまとめてその絵姿を描かせた。愛と死とをメイン・テーマとするロマン派の魁たるトーマス・チャトンは我と我が手で命を断った。死は常に人の恐れるところであり、その事実はかわることがない。しかし、それを情緒としてとらえることをしなかった、少なくとも避けようとしたのは十八世紀、いわゆる「理性」の時代であった。不死の病や若死が日常茶飯の事であったがゆえに、かえってそれをいたずらに思い嘆くことを潔しとせず、死や流血の表現のいきすぎをとがめ、たとえば舞台からもおどろおどろしい場面は削除された。「良識」はむしろ、もっと乾いたもっと簡潔な形で死というものを総括し、秩序の中に組み入れることによって死が生者に対して持っている無言の重圧を少しでも軽くしようと試みた。たとえば、その一つのあらわれが墓碑銘である。

詩人が墓碑銘を手がけることは十八世紀に始まった訳ではない。さかのぼってベン・ジョンソンなどにも多くの作品が残されている。墓碑銘や頌歌などを書くことは詩人の社会的役割の一つであり、必ずしも詩人の追悼の念が色濃くあらわれたものでないとしても、それをとがめるのは酷かもしれない。少なくともジョンソンのそれは、優雅で精妙な文体が充分生かされたものではある。

An Epitaph

What Beautie would have lovely, stilde,
What manners prettie, Nature milde,
What wonder perfect, all were fil'd,
Upon record in this blest child,
And, till the coming of the Soule
To fetch the flesh, we keep the Rowle.⁽¹⁾

この墓碑銘は、調べによると1627年5月18日に3才半で死亡したエリザベス・チュート嬢のためのものだという。ダンがエリザベス・ドルーリー嬢とさして懇意ではなかったと同様、ジョンソンもこの幼児に対してとりわけ深い愛情を抱いていた訳ではないだろう。しかし、墓

碑銘といえどもその詩行の中でうたわれているのはその死者についての墓誌となるべき記録ばかりではなく、何よりもまず死そのものなのである。死について考えること、あるいは死によって想いをめぐらすことが墓碑銘の生みの親であり、また同時にそれが目的としているものでもあるのだ。

ドライデンも又、エレジー及び墓碑銘をおよそ十数篇残している。彼の処女作も、ウェストミンスター校在学中十七歳のときの追悼詩、「ヘイスティングス卿の死に当りて」(1649)である。これはヘリック、マーヴェルなどの作品と共に公的追悼詩集「詩神の涙」(Lacrima Musaram)にいれられているものであるせいか、いささか誇張的でかたくなしい点があるものの、死者であるヘイスティングス卿というのはドライデンの級友であり、決しておざなりに書かれたものではない。

Must then old three-legg'd gray-beards, with
their Gout,
Catarrhs, Rheums, Aches, live three Ages out?
Times Offal, onely fit for th' Hospital,
Ort'hang an Antiquaries room withal;
(ll 81~84)⁽²⁾

これに続く数行は、若く才長けた友人の死に遭遇したドライデンのやり場のない苦々しい思いを述べたものである。むしろイエーツやT. S. エリオットを思わせる様なこの痛烈さは、後に諷刺詩人として揺るぎのない地位を築くドライデンの詩才のありかを的確に示しているものであろう。死を悼まれる者ばかりでなく、死を悼んでいる者の姿や情念が、詩行の中に浮き彫りにされてきているのだ。勿論、彼の場合も弔詩を捧げる相手が必ずしも知己であるとは限らないから、いきおい典雅ではあるが平坦なものに終わることもある。たとえば、「麗しく清らかな婦人の碑」(The Monument of Fair Maiden Lady)でうたわれるのは次の様な女主人公である。

A Female Softness, with a manly Mind;

A Daughter duteous, and a Sister kind;
In Sickness patient; and in Death resign'd.
(ll 34~36)⁽³⁾

巧みな頭韻と前後対照による均衡のたしかさは、たしかに monument にきざまれるにふさわしい。しかしやはり平担で感情が籠っていないとされる「エレオノラ」(Eleonora)同様、歌われているのは数々の美点を一身に集めていたかのような女主人公ではなく、彼女を媒体として地上の生を想い、天上の永遠を憧れ、かくありたいと願う詩人自身の魂であると見ることもできよう。さらに「オールダム氏の霊に捧ぐ」(To the Memory of Mr. Oldhem)等は、明らかに作者自身の歎きと悲しみをあらわにしている上、芸術が死や時を超えて永遠の生命を持つことを主張している。それは故人にとってと同時に詩人自身にとっても大きな慰さめであり願望であるのだ。

A noble Error, and but seldom made,
When Poets are by too much force betray'd.
Thy gen'rous Fruits, though gather'd ere
their prime,
Still shew'd a Quickness; and maturing Time
But mellows what we write to the dull
Sweets of Rhyme.

(ll 17~21)⁽⁴⁾

グリアソンも T. S. エリオットもこれをドライデンの代表作として挙げ、その完璧さを称賛しているのも、歌うものと歌われるもの、そしてその結晶である作品との三者がみごとに合致して平衡を保っているからであろう。⁽⁵⁾

*

ドライデンに私淑していたポープには 24 篇の墓碑銘(ポープ自身のためのものも含む)と一篇のエレジーとがある。その墓碑銘については、後にサミュエル・ジョンソンが「ポープ論」の中で手ひどく批判していることでも知られている。多くは彼の以前書かれた詩行をあちこちからかき集めて焼き直したものであり、冗長で散漫、格調を欠くというのである。たとえば、チャールズ・サックヴィルのためのもので、

Dorset, the Grace of Courts, the Muses Pride,
Patron of Arts, and Judge of Nature, dy'd!
(ll 1~2)⁽⁶⁾

とあるのに対し、墓碑銘の主が死んでいるのは自明のことであるから、この二行は殆んど意味がない、とジョンソンは不満を述べる。⁽⁷⁾ポープはこの貴族を王政復古期の最高のウィットの持主とみなしていたが、ポープよりも 50 才も年長のサックヴィルとはさほど親密な関係にあつたわけではない。又、サックヴィルが死去したのは 1706 年のことであるのに、この墓碑銘が書かれたのはだいたい 1731 年頃であろうと思われる。四半世紀もたてば、ポープとしても詩神を蘇らせるためにはサックヴィルにもう一度「死んで」もらう必要があつたとしても同情の余地もあろうというものではなからうか。同様に、大文字や長母音、二重母音を多用して、荘重なリズムを強調する言葉づかいかにも、やや「無理をした」様子がうかがえるといえる。

Blest Satyrlist! who touch'd the Mean so true,
As show'd; Vice had his Hate and Pity too.
Blest Courtier! who could King and Country
please,
Yet sacred keep his Friendships, and his Ease.
(ll 7~10)

更にそれに続く行では、ポープ一流の言葉遊びでしめくくことになる。

Blest Peer! his great Forefathers ev'ry Grace
Reflecting, and reflected in his Race;
Where other Buckhuasts, other Dorsets shine,
And Patriots still, or Poets, deck the Line.
(ll 11~14)

サックヴィルの先祖というのは、「王者の鑑」(A Mirror for Magistrates)の序文や、「ゴーボダック」(Gorboduc)の共作で知られる初代伯爵をさすものである。最後の「Line」という一言は、ルネサンス思想概念から読めば、思考のよすがとなる「支柱」であるだろうし、貴族の誇る「血統」ともとれ、又詩人がその名声を得る手段である「詩行」をも意味するだろう。このような多重性のある言葉づかいは、たくみではあるが、いやたくみであるからこそ一層しらじらしい響きを感じさせかねない。ポープは「死」とはほど遠いところにいるのだ。契機となった現実の死そのものが既に遠いものであると同時に、しかつめらしく死を普遍化しようとする態度が、一切の生々しさから彼を遠ざけているのだ。

もう一つ、ジョンソンが酷評している墓碑銘をとりあ

げてみよう。亡命中のパリで死去したフランシス・アタベリー師のためのもので、彼に会う為に渡仏して再会を果たした途端に息をひきとった一人娘との対話形式になっている。

DIALOGUE

SHE

Yes, we have liv'd - one pang, and then we part!

May Heav'n, dear Father! now, have all thy Heart.

Yet ah! how once we lov'd, remember still, Till you are Dust like me.

HE

Dear Shade! I will:

Then mix this Dust with thine - O spotless Ghost!

O more than Fortune, Friends, or Country lost!

Is there on earth one Care, one Wish beside?

Yes - Save my Country, Heav'n,

- He said, and dy'd.

全くたいしたメロドラマである。ジョンソンは、作者の名譽のためにもこの作品は抹消してしまった方がよい、とすら言う。現実のシチュエーションもたしかに悲劇ではあるのだが、こうして徹頭徹尾詠嘆されてしまうと、誰もがそれを誇張された絵空事のように思い、移入すべき感情も昇華されるはずの冥想も遠ざかってしまうのを感じるだろう。ポウプは又しても、死から読者を疎外するのである。

ジョンソンが、ポウプの墓碑銘の中で最も価値があるとしているのは、「乳癌で死せるコーベット夫人に」(“On Mrs. Corbet, who Died of a Cancer in her Breast”)である。この夫人はシュロップシュア在のサー・ユーヴディルの娘で1724年あるいは1725年にパリで死去している。墓碑銘はその後5・6年たってから書かれた。

Here rests a Woman, good without pretence,
Blest with plain Reason and with sober Sense;
No Conquests she, but o'er herself desired,
No Arts essay'd, but not to be admir'd.
Passion and Pride were to her soul unknown,

Convinc'd, that Virtue only is our own.
So unaffected, so compos'd a mind,
So firm yet soft, so strong yet so refin'd,
Heav'n, as its purest Gold, by Tortures try'd;
The Saint sustain'd it, but the Woman dy'd.

重々しく仰々しい感じが控えられているのは、墓の主の生前のあり方のせいもあるだろう。彼女は名声も名譽も栄華も持たぬ、いわば一般人であった。三行目には、苦しみと闘った晩年の彼女に対する同情と尊敬がにじみでている。ジョン・ポール・ルツンは、「名声の殿堂」(*The Temple of Fame*)の中のシーザーやマルクス・アウレリウスへの賛辞を思わせると指摘するが、⁽⁸⁾逆説的にこの女性が名声とほど遠いところに生きた人であることが、いわば繰り返して使われてきたであろうこのような決まり文句に生命を吹きこんでいるのではないだろうか。繰り返される“s”の頭韻は、つつましかでひそやかな亡き女性の生そのものを思わせると同時に、その死を悼む詩人の嘆息であるかのようにこの作品全体を覆い隠しつつ流れていくのである。しかし、今度も又ポウプの技巧過多であったのかもしれない。ウィリアム・ワーズワースは「墓碑銘論」(“Upon Epitaphs”)で、この作品を槍玉にあげ、誠意のなさを口をきわめて批難している。このような女性、広く世間にその死を悼まれることもなく、あるいは詩人個人の心に深く影をおとしている訳でもない平凡な女性に対し、ポウプが墓碑銘を手がけるという事自体が、ワーズワースにとっては矛盾であり誠実でないことに思われたのだろうか。ポウプは又も、論点をずらしてしまっているのだ。

This may be the best of Pope's Epitaphs; but if the standard which we have fixed be a just one it cannot be approved of. First, it must be observed, that in the Epitaphs of this Writer the true impulse is always wanting, and that his motions must of necessity be feeble. For he has no other aim than to give a favorable Portrait of the Character of the Deceased.⁽⁹⁾

ポウプが最も若くして手がけた墓碑銘の一つが、「キャリル卿のための墓碑銘」(“On John Lord Caryll”)である。彼は、*The Rape of the Lock*の執筆をポウプにすすめたキャリルとは別人で、1689年フランスに渡り、ジェイムズ二世の亡命政府で国務大臣をつとめ、1711年に死去している。墓碑銘は同じ1711年ポウプ

23才の年に書かれたものである。

Ye Few, whom better Genius does in spire,
Exalted Souls, inform'd with purer Fire!
Go now, learn all vast Science can impart;
Go fathom Nature, take the Heights of Art!
Rise higher yet; learn ev'n yourselves
to know;
Nay, to yourselves alone that knowledge owe.
Then, when you seem above mankind to soar,
Look on this marble, and be vain no more!
(ll 10~17)

「批評論」(An Essay on Criticism)などでなじみ深い思想や言い回しが溢れてはいるが、テーマの中心は人の野望や虚栄のむなしさであり、死が人間に対して持つ支配力への畏怖である。今では陳腐と思える詩句(それもポウプの作品が人々に膾炙してしまったせいであるだけのことだが)や気負った物言いを取りのぞいてみると、そこに見えてくるのは、ごく単純素朴な死への怖れ、へり下った心のふるえに他ならない。

最後に、ポウプが最晩年に書いたものを見てみよう。「自分自身のための墓碑銘」("On Himself")1741年、死の三年程前に書かれたものである。

Under this Marble, or under this Sill,
Or under this Turf, or e'en what they will;
Whatever an Heir, or a Friend in his stead,
Or any good Creature shall lay o'er my Head;
Lies He who ne'er car'd, and still cares not
a Pin,
What they said, or may say of the Mortae
within.
But who living and dying, serene still and
free,
Trusts in God, that as well as he was, he
shall be.

30年という月日を経て、ポウプの死への想いはどのようにかわってきたのだろうか。ジョンソンは、あまりに軽佻浮薄であるとしてこれをしりぞけている。実際にポウプが死んだ時、彼の墓を飾ったのはこれではなかった。しかし、十数年後のこと、ポウプの作品集を編んだウォーバートンは彼の碑を新たに建て、そこにやはりポウプ自身の手になる次の様な詩句を彫ってしまった。

Epitaph. For One who would not be
buried in Westminster-Abbey(1738?)
Heroes, and Kings! your distance Keep:
In peace let one poor Poet sleep,
Who never flatter'd Folks like you:
Let Horace blush, and Virgil too.

ポウプはまるで死神をあざわらうかのように、言葉とたわむれる。死への恐怖も厳肅な気持も、およそあずかり知らぬ様子でさえある。しかし、気をつけて読んでみるなら、ポウプがここでたわむれているのは死に関するイメージではなく、生者あるいは人の世のよしなしごとであることが解るだろう。むしろここでは、彼は死について思うことをはっきりと避けているとさえ言える。ことさらにいかめしい言葉を使うことや、技巧や機智で煙幕を張るようにして、死と直面しきれない割り切れなさをそれなりに補ってきた詩人は、もう殆んど開き直って軽々しく人を喰った態度を装うことによって、またもや“死”を遠ざけているのである。

ノースロップ・フライは、エレジーから分離したコンヴェンションとしての墓碑銘には賞讃や賛美の調子で書かれるものからごくくだけた野卑な形式のものまで、様々な様式の幅があるという。⁽¹⁰⁾しかしギリシャにまで遡るその伝統の中で、元来墓碑銘が持っていた機能は「目印」としてのそれであり、道行く人の注意をとらえ無理にも読ませずにはおかない人目を惹く性質のものでなくてはならないと彼は定義する。ここでその点にあらためて注意を喚起しておいた上で、ポウプの作品の中で唯一「エレジー」という名のもとにうたわれる作品に目を向けていきたい。

*

「薄幸の女性に捧げるエレジー」(Elegie to the Memory of an Unfortunate Lady 以下「エレジー」)は1717年頃の作とされ、発表当時はVerses to~という題であったのが後にElegie to~とあらためられた。同時に出版された「エロイーザよりアベラールへ」と共にそのパセティックな調子でポウプの他の作品群とは性質を異としているので知られている。ポウプの中に潜んでいるいわゆる「ロマンティック」な性向を示す証拠としてあげられることも多い。ウィリアム・ブレイクはこれらの作品を通してのみポウプに接近しえたのか、その代表作や作風を示しつつ詩人たちのポートレートを描くというシリーズで、ブレイクはポウプの顔を中心に、右

に僧院で祈りをささげるエロイズを、左に短剣と長剣とを携えてたたずむ女性の亡霊を配している。⁽¹¹⁾「エレジー」の冒頭から出現するこの亡霊は確かに印象的であり、読む者の意識をとらえずにはおかない。

What beck'ning ghost, along the moonlight
shade
Invites my step, and points to yonder glade?
'tis she! — but why that bleeding bosom
gor'd,

Why dimly gleams the visionary sword?
(ll 1~4)

これはベン・ジョンソンの「レディ・ジェイン・ポーレットへのエレジー」(“An Elegie on the Lady Jane Pawlet”)のエコーを有するものであるが、それよりさらに鬼気迫る雰囲気高めるのは、gやb、またvやdの音の響きによるところも大きいといえる。ベン・ジョンソンの作品は次の様に始まる。

What gentle Ghost, besprent with April dew,
Hayles me, so solemnly to yonder Yewgh?
And becking woos me, from the fatal tree
To pluck a Garland, for her selfe, or mee?
(ll 1~4)⁽¹²⁾

ポウプの「エレジー」の亡霊は、「ハムレット」の父王の亡霊と同じく威圧的であり、又悲劇的である。この数行で当時の読者ならシェイクスピアあるいは(同列に置けるものではないにせよ)ニコラス・ロウのメロドラマを、又時代を経た読者ならウォールポールやラドクリフ夫人のゴシック・ロマン、又エドワード・ヤングやロバート・ブレアらの墓地派の詩の世界を想起し、すでにして多層的な次元に足をふみ入れることになる。シェイクスピアに関して言うなら、更に次の二行も「オセロウ」終幕のせりふを思わせないこともない。

Oh ever beauteous, ever friendly! tell,
Is it, in heav'n, a crime to love too well?
(ll 5~6)

F・R・リーヴィスは、ポウプは重々しく、むしろわざとらしく書き始めてはみたものの、書き進むにつれてパーレスクの調子を混じえはじめ、その結果としてたとえば「ブルーロック」のそれにも似た絶妙な効果をあげ

ているとしている。⁽¹³⁾ たしかに、以下の詩行に対して持っているこの冒頭部分の異化効果は注目できるが、その前にまず、先に挙げた墓碑銘の第一の機能がここで働いているのではないだろうか。すなわち、人目を惹き注意を喚起するというそれであり、ミュージに呼びかけるエレジーの形式よりも、むしろ墓碑銘としての性質をこの詩が持っていることを示すものだと考えられるのである。スカリジェの「詩学」によれば、エレジーはごくおだやかな序で始まることもあれば、感嘆や疑問の文で始まる例もあるというのだが、10行の中に4つの修辭疑問文と2つの感嘆符というこの冒頭部は、ジョゼフ・ウォトンならずともいささか「唐突」であると思うだろう。⁽¹⁴⁾ 単に劇的効果を煽情的にあおる以上に、その唐突さは雄弁なのである。更に続けて冒頭部を読んでみよう。

To bear too tender, or too firm a heart,
To act a Lover's or a Roman's part?
(ll 7~8)

To act a Roman's part とは自害することである。act と part の間に再び劇場的なイメージが浮びあがるが、それはさておいて重要なのはRoman's という一語である。エレジーにおいて異教的な要素が組み入れられてくるのは既に確立したコンヴェンションであることは今更言うまでもないだろう。たとえばミルトンの「リシダス」にもその例はみられる。しかしこの「エレジー」においては、実は異教的要素は決して多いわけではない。第二パラグラフにおいて、

Ambition first sprung from your blest abodes;
The glorious fault of Angels and of Gods;
Thence to their Images on earth it flows
And in the breasts of Kings and Heroes glows!
(ll 13~16)

とある中の、神々や王者、英雄たちのイメージに登場する他は、後の41行で“the Furies”という語がみられる位である。ローマ古典のエレジーの枠組を、ポウプは勿論意識していない訳ではないだろうが、誇り高いローマ人と同一化された女主人公を支えるだけの相関物は充分与えられていない。むしろだからこそこのRoman's という語は浮き上がってくるのであり、後の一節と呼応する伏線になりうるのだ。今は、この語に注意を喚起するにとどめておくことにする。

ポウプは十八世紀最初の詩人であると同様、十七世紀

最後の詩人であることも忘れてはならない、とリーヴィスは言う。⁽¹⁵⁾ そのポウブの形而上詩人を思わせる表現は、ジョン・ミドルトン・マリーも指摘しているところである。⁽¹⁶⁾

Most souls, 'tis true, but peep out once an age,
Dull sullen pris'ners in the body's cage:
Dim lights of life that burn a length of years,
Useless, unseen, as lamps in sepulchres;
Like Eastern Kings a lazy state they keep,
And close confin'd to their own palace sleep.

(ll 17~22)

高さを望んで舞い上った女の魂と比べて、凡庸で心貧しき人々の方が死者にたとえられているが、リーヴィスも指摘するように、ここでの深刻と滑稽の入り混った調子は形而上詩人たちやあるいはシェイクスピアにも共通してみられるものである。'peep'という卑近な語によって、読者は肉体という檻の中に閉じこめられた魂に対し、憐れみと同情とおかしさとやるせなさのないまぜになった複雑な感情を呼び醒まされるのだ。Sprung, flows, glowsという述語を伴ってきたambitionの活力と比して、17行及び19行の単音節の語の羅列は、メランコリーや緩慢な低調を示すのにふさわしく効果的であると言えよう。

次のパラグラフに入っても、ふたたび形而上的メタファーに相まみえることになる。

As into air the purer spirits flow,
And sep'rate from their kindred dregs below;
So flew the soul to its congenial place,
Nor left one virtue to redeem her Race.

(ll 25~28)

ここでも先のpeepが果たしたと同様の効果を、dregという平俗な語が生み出している。それと同時にpurerという形容詞もいささかその神通力を失ない、本来の賛辞から別の次元にすりかえられていくようである。ヒロインを美化し対象化していくことがめざされている訳ではない、という兆がかすかに見えてくるのだ。

ヒロインを死に追いやった後見人を非難する叫びにはじまる第四パラグラフは、エレジーのコンヴェンションにおいて、守護の精たるべきニンフの不在や無力さ、怠慢さが非難されるのにも似ている。しかし、コンヴェンショナルである以上に、このパラグラフでの表現はリアルであり散文的であるとさえいえるdrynessを漂わせて

いる。

Cold is that breast which warm'd the world
before,
And those love-darting eyes must roll no
more,

(ll 33~34)

この二行は先のパラグラフのpurerという語同様、ヒロインに対してポウブのとっている態度が決して一面的な賞讃や儀礼ばかりではないということを示してもいる。*The Rape of the Lock*の中の、ベリングに対する描写を思い出した。

Belinda smil'd, and all the World was gay.

(Canto II, l 52)

Beauties in vain their pretty Eyes may roll

(Canto II, l 33)

今はなき薄幸の女性も、生前はコケットの一人であったかのように、ここでは全く共通のメタファーが使用されている。詠嘆調の詩文の中にこっそりと意地の悪い皮肉をひそませていたと思えなくもないが、むしろポウブはヒロインを人の世から超越した別人格として昇華させることを潔しとせず、現世的な次元にとどめておきたがっているのではないか。後見人への批難も、修辞を越えて激烈でかつ極めて写実的なものである。

And frequent hurses shall besiege your gates.
There passengers shall stand, and pointing
say,

(while the long fun'erals blacken all the way)

(ll 38~40)

このような現実的俗界的な批難は、後の「ダンシアッド」等における激しい毒舌を思わせなくもない。

第五パラグラフは再び修辞疑問と感嘆を多用して、自害である故に葬いも十分されないヒロインの不幸な身の上明らかにされる。第四パラグラフでは冒頭のおどろおどろしい幻の世界から、一挙に俗世界の明るみに引き出されるような思いを味わわされた読者は、更にここでも、俗界と冥界のはざまに造り出された空間を見出す。

By foreign hands thy dying eyes were clos'd,
By foreign hands thy decent limbs compos'd,

By foreign hands thy humble grave adorn'd,
By strangers honour'd, and by strangers
mourn'd!

(ll 51~54)

この部分のアナフォラは、冒頭の強烈さにも劣らず強い印象を与える部分である。一応は、不遇な身の上のヒロインが異国に渡り、その地で命を断ったという状況説明ともなるところであるが、それにしてもあまりに心に残る言葉づかいであるせいか、イアン・ジャックも次のような注をつけている。

It has usually been taken for granted that 'foreign' has its most common modern meaning, as it sometimes has in Pope. Elsewhere, however, he uses the word to mean 'belonging to or coming from another district, county, society, etc.' The proximity of the words 'friends', 'domestic' and 'strangers' could support the older meaning of the word.⁽¹⁷⁾

ヒロインを抱き埋葬する手は、異国の人のものであると同様、彼女にとっては「異質」なものでもあるのだ。いや、それが「低俗・凡庸」な人々を指す、ということではない。死そのもの、そして生そのものもまた 'foreign' なものなのだ。さらに、哀悼の歌を捧げる詩人も彼女にとって 'foreign' であり、詩人ポウプ自身もこの世にあっては 'foreign' な存在であるかもしれない。この詩全体のキーワードはそこにある、と私には思える。

そしてそのキーワードから我々の眼をそらそうとでもしているかのように、次の詩行は再び俗臭ふんぶんたるリアリティを描いた一種の bathos となる。

What tho' no friends in sable weeds appear,
Grieve for an hour, perhaps, then mourn a year,
And bear about the mockery of woe
To midnight dances, and the publick show?

(ll 55~58)

目まぐるしく死と生、聖と俗との対比を繰り返してきた後、ここで一転してコンヴェンショナルな葬いのイメージが並べられる。大理石、悲歌、花におおわれた墓、緑なす芝生。死と再生、天の慰めの実現と耳なれた詩句が続く。しかし見のがしてしまっただけではないのは次の一行である。

And the green turf lie lightly on thy breast:

(l 64)

なにげなく自然な詩句であるが、これは古代ローマの墓石に彫られる最もありふれた碑文、'Sit tibi tena levis', (S. T. T. L. と略されることすらある) の翻訳に他ならない。第一パラグラフで注意を喚起した、'Roman's' との呼応がここで完了する。この「エレジー」における伏線は、すなわち墓碑銘としてのエネルギーが、この詩の中に潜んでいるということなのである。

第五パラグラフの最後で、

While Angels with their silver wings o'ershade
The ground, now sacred by thy reliques made.

(ll 67~8)

と浄化を与えられたヒロインであるが、もう一つの consolation が求められねばならない。冒頭に現われた詩人をさしまねく亡霊は、おのれの魂が安まる為に、苦しみを与えた人々への復讐をも求めているのだ。ちょうどハムレット王の亡霊がそうであるように。こうして手渡された 'visionary sword' で、詩人はさらにいまひとつの解決を果たさねばならない。悪魔払いの第6パラグラフで行なわれる。

A heap of dust alone remains of thee;
'Tis all thou art, and all the proud shall be!

(ll 73~74)

単音節の語のみによって成る74行では、呼びかけはヒロインのみならず、つれないしうちで彼女を苦しめた後見人や家族にも向けられ、あまねく人を迎える死神の許にうち並ぶ人々をメランコリックな静寂で包みこんでいく。先にふれた「キャリル卿への墓碑銘」と共通する結末と言えるかもしれない。

しかしポウプはさらに八行をつけ加える。この「エレジー」に影響を受けたというトマス・グレイの「墓畔哀歌」の最後の三連が作者自身の為の墓碑銘となっているように、この最後のパラグラフも又、詩人も同じく死を待つ運命であることを述べている。しかし、ここで 'he' と三人称で書かれている詩人と、亡霊にさしまねかれた語り手、そして作者ポウプ自身とはどのような関係にあるものなのかは曖昧であることを心しなければならぬ。このような視点の多重性は、形而上詩人たちから受けつ

がれた遺産であり、若き日のポープが好んで用いるトリックでもある。しかし巧みに仕組まれたわなには誰しも落ちやすいものである。

Then from his closing eyes thy form shall
part,
And the last pang shall tear thee from his
heart,
Life's idle business at one gasp be o'er,
The Muse forgot, and thou belov'd no more!
(ll 79~82)

ここで he = ポープと決めてかかり、更に 'belov'd' という語に目をくらまされると、この詩全体がポープとある実在の婦人との報われざる恋愛を描いたものだという推理が行なわれてしまうのだ。それに加えてポープはもう一つのトリックをしかけている。1751年というからポープの死後7年にあたるが、ウォーバートンの出版した作品集には、P というイニシャルのもとに次の様な注が記されているのだ。

See the Duke of Buckingham's verses to a Lady designing to retire into a Monastery compared with Mr. Pope's Letters to several Ladies, p.206. She seems to be the same person whose unfortunate death is the subject of this poem. [P]⁽¹⁸⁾

ポープの書簡というのは、おそらく1735年に出版された書簡集の中の、「不幸な婦人に」と宛書きされたものを指すのだろう。修道院入りを考えているらしい徳高い婦人をなぐさめ、ひきとめるといった内容のものであるが、日付もなく、相手が実在するのかどうか証明するのは何もない。⁽¹⁹⁾しかし、多くの人々がまんまとだまされてしまうのだ。ジョゼフ・ウォートンは、「ポープの著作と才能について」(*An Essay on the Writings and Genius of Pope* 1756年)の中で、

If this ELEGY be so excellent, it may be ascribed to this cause; that the occasion of it was real.....Events that have actually happened are, after all, the properest subjects for poetry.

と書いている。そして6年後の第二版では、ポープの友人である貴族に捨てられてフランスに渡り、修道院に入

ってそこで不幸な生涯を閉じた女性の逸話と、彼女に対するポープの情熱とをまことしやかに伝え、そのような実体験が詩の美しさを増している、と述べるのである。サミュエル・ジョンソンもこれが実体験に基づく作品であることを前提として、逸話の背景を調べても成果のなかったこと、そしてそのような伝記的情報に事欠くことをむしろこの詩の欠点とみなし、かの有名な結論を下すに至っている。

Poetry has not often been worse employed than in dignifying the amorous fury of a raving girl.

その後もモデル探しは続けられる。ポープの身近な女性ではウェストン夫人やコープ夫人など、それなりに「幸薄い」女性たちが候補として挙げられ、ティロットソンなども、モンタギュー夫人への当時のポープの愛情が、屈折想像力に支えられた形で表現されている点がある、と推理している。その他でも、ジェトルマンズマガジン誌、ジョゼフ・ウォートン、ホレス・ウォルポールなどが、情況証拠、もっとありていいうなら噂話にもとづいて様々な説を紹介し、イアン・ジャックもそれらの説の真偽を確かめるために役所の文書記録に当たってみているのだから冗談ごとですまされることではないのである。⁽²⁰⁾しかし、これは全てポープの策略だったのではないだろうか。エレジーの伝統から言えば、架空の死者に対して書かれるということもめずらしくはない(スペンサーの *AEglogue* 等)。だが読者を想定した場合には、実際に起った悲劇的事件を下敷にしている方が、はるかに好奇心をそそるであろう。その効果がポープの頭の中で計算されなかったはずはない。ポープはスペインに対して次の様に述べている。

Most little poems should be written by a plan. This method is evident in Tibullus and Ovid's elegies, and almost all the pieces of the ancients.⁽²¹⁾

ここではそのプランの一つに、読者の興味をそそると同時に注意をそらせるような仕掛けが加えられていたのかもしれない。イアン・ジャックはヒロインの魂を鎮めるための exorcism がそのプランであるとみなし、⁽²²⁾ゲーネラトンは emotionalism と intellectualism の和解がめざされていると考えている。⁽²³⁾ 読者それぞれがポープの意図を独自のところに見出すことはできるだろう。私

にとっては、キーワードは‘foreign’であり、粹組みを墓碑銘という形式におく、ポープ自身の自己からの exorcism を読みとってみたいのだ。

ポープは元来脆弱なたちであり、病との闘いがすなわち生活であるような一生をおくらざるを得なかった。そのような彼にとって、ごく若い頃でさえも死が無縁と見えるような時期があったとは考えがたい。時代的背景も勿論影響してはいただろう。しかしことさらに自然と自然の理、均衡と秩序を重んじるポープの文学観は、逆説的に響くかもしれないが、自らの肉体的存在のあやうさを身にしみて意識しているところから湧いてきたのではないだろうか。不自然な肉体に苦しめられ、しかしそれでもその肉体という檻から出ることではできない。「エレジー」の18行に登場する‘Dull, sullen pris’ners’はポープ自身の姿でもあるのだ。その肉体を肯定し、死の恐怖を乗り越えるためには、自分の存在をも組み入れてくれる大きな概念を設定すること、そして卑近なことから目をそらしていくことにあるだろう。しかし、それすらも言うは易く行うに難しいことである。ポープの人生後半にみられる社会との衝突、挑発的な攻撃の姿勢は皆、彼の精神的軋轢と屈折の生み出すものであるに相違ない。墓碑銘を書く、という行為にも当然屈折した思いがまわりつく。他人の死を見送る、という際に必ず memento mori の感慨はつきものだとは言え、それが観念の域を出ない場合もあるだろう。しかしポープの場合、死を想うことは殆んど自意識と同意語に等しかった。防衛策として詩人はむしろ死から眼をそらす。あるいは読者の眼をそらそうとする。彼の書いた墓碑銘はどこか割り切れないものを残す。それは一つには彼の死に対する意識過剰のせいであり、直接死というものにかかわるということが彼のミュージズをすくませているのだ。「エレジー」に扱われる死は架空のものである。架空であるということで初めてポープは死を対象化し、観念化することができた。⁽²⁴⁾モデル問題で読者の目を十分そらした上で、彼が試みていたのは抑圧のかせから自由になったところで想う死であり、墓碑銘であった。ヒロインを埋める‘foreign hands’は現実の世界でポープが味わっていた生からの疎外を象徴するものなのだ。架空のものであるヒロインは彼の中に棲むアニマとも思え、その観点から言えば、「エレジー」は詩人が詩人の内なる自己に訣別するための墓碑銘と考えることもできるかもしれない。自らの両性具有性について述べたピーター・ボロ伯への手紙は、1723年頃書かれたものであるが、少なくとも「エレジー」の後には彼の女性的資質をうかがわせる作品はとりわけてみられない。1718年頃からは「ダンシャッド」

の元となる著作が始められるし、1730年には *Essay on Man* (!) が書かれる。そういった意味では「エレジー」はポープの詩作群のなかでのひとつの碑石、あるいはメルクマールとなるものなのではないだろうか。では最後にポープ自身の警句をひいてしめくくりとすることにしよう。

Epigram. On One who made long Epitaphs
(1736)

Friend! for your Epitaphs I'm griev'd,
Where still so much is said,
One half will never be believ'd,
The other never read.

注

- (1) W.B. Hunter Jr. ed., *The Complete Poetry of Ben Jonson*, New York University press, 1963.
- (2) J. Kinsley, ed., *The Poems of John Dryden*, Oxford, Clarendon Press, 1958
- (3) *ibid.*
- (4) *ibid.*
- (5) H. J. C. Grierson, *Cross Currents in European Literature of the 17th Century*, p 355
T.S. Eliot, *Selected Essays*, Faber & Faber p 302
- (6) John Butt, ed., *The Poems of Alexander Pope*, Methuen, 1963
以下ポープの作品は全てこの版による。
- (7) Samuel Johnson, "Alexander Pope" *Lives of the English Poets*, Oxford, 1905
- (8) John Paul Russo *Alexander Pope - Tradition and Identity*, Harvard Univ. Press 1972 p 173
- (9) W. J. B. Owen & J. W. Smyser, *The Prose Works of William Wordsworth*, Oxford, 1974 vol II p 77
- (10) Northrop Frye, *Anatomy of Criticism*, Princeton, 1957 p 296
- (11) W. K. Wimsatt, "An Image of Pope" Hilles & Bloom ed., *From Sensibility to Romanticism*, Oxford. 1965
- (12) *The Complete Poetry of Ben Jonson*

- (13) F. R. Leavis, *Revaluation*,
Chatto & Windus, 1936 p70
- (14) Joseph Warton, *An Essay on the Writings
and Genius of Pope*.
- (15) Leavis, *ibid.* p 71
- (16) John Middleton Murry, *Countries of the
Mind*
- (17) Ian Jack, 'The Elegy as Exorcism'—Pope's
'Verses to the Memory of an Unfortunate
Lady', Mack & Winn, ed., *Pope: Recent Es-
says by Several Hands*, The Harvesters
Press, 1980 p 800
- (18) William Worburton, ed., *The Works of
Alexander Pope Esq.....with his Last Cor-
rections, Additions, and Improvements*, Lin-
tot, 1751
- (19) ポップが偽作の書簡、あるいは日付を偽造した書
簡を意識的に書簡集に編んだのは周知のことである。
- (20) ジェントルマンズマガジン誌（1784年11月）に
よれば、この婦人は Scudamore というカトリック
教徒の一門の出で、伯父である後見人の気にそまぬ
恋人と別れを余儀なくされ、アントワープの修道院
に入り、そこで熱病にかかった結果憂鬱症となり、
剣で胸をついて自殺を果した、というのである。ホ
レース・ウォルポールはこの記事を読んでジョゼフ
・ウォトンに、ポップの知人であるハーヴェイ夫人
から聞いた話として、「名前は Withinbury で、死
に方ももっと下品に首つり自殺であった」という手
紙を書いている。その婦人はポップ同様不具の身で、
しかも仲をひきさかれた恋人は他ならぬポップその
人だというのだ。イアン・ジャックの調べによれば、
当時そのような名の一族はおらず、住所とされてい
た所に住んでいたカトリックの一族の名は Slaughter
(!) という、ということだ。1806年のウィリア
ム・バウルズの編んだポップ作品集には、付記とし
てヴォルテールの語った話が載せられている。それ
によれば、この婦人の恋の相手はポップでも、身分
違いの同国人でもなく、フランス宮廷で知り合った
貴族、ベリー公シャルル・エマニュエルであるとい
うのだ。
- (21) Joseph Spence, *Observations, Anecdotes,
and Characters of Books and Men*, Oxford
1966, I.p 226
- (22) Ian Jack, *ibid.* p 276
- (23) Yasmine Gooneratne, *Alexander Pope*,
Cambridge, 1976 p 76
- (24) 1713年から1717年位の間はポップの生涯で最
もよい健康状態に恵まれた時だった。「ウィンザー
の森」「イリアッド」の翻訳、「名声の殿堂」「巻
毛略奪」「エロイーザよりアベラールへ」等、極めて精
力的に仕事をすすめていた。「エレジー」もこの時
期に書かれている。しかし1717年10月23日にはポ
ップの父が突然に死去し、ポップは再び死と隣り合
わせの生活に引き戻されるのである。ポップの病状
に関しては、M. Nicolson & G. S. Rousseau,
"This Long Disease, My Life": *Alexander
Pope and the Science*, Princeton, 1968 に詳
しい。